

南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査(Ⅱ)

—海洋採集遺物からみた海上交通—

Primary Investigation into discovering Sunken Ships in the Southwest Island (Ⅱ)

-Underwater artifacts and marine transportation-

宮城弘樹・片桐千亜紀・比嘉尚輝・崎原恒寿

MIYAGI Hiroki KATAGIRI Chiaki・HIGA Naoki・SAKIHARA Tsunehisa

ABSTRACT: This paper tries to organize the basic information regarding the possible discovery of sunken ships in the Southwest Archipelago. A paper of the same title was already issued last year, introducing the related artifact collections in Okinawa Archipelago. This time, the focus is upon the Amami Archipelago in order to complete the primary investigation on the possibilities of discovering sunken ships in the entire Southwest Archipelago.

The paper includes reports on various artifact collections found in underwater and coastal areas, underwater and land discovery of vessel furnishings such as anchor and ballast, and artifact collections from specific locations where the shipwrecks were recorded in archives.

As a result, seven sites with maritime artifact distributions were recognized in Kagoshima and Amami Archipelago, and six locations of stone anchor discovery were registered. One archival record about a shipwreck event was also found. Analyzing the entire information, a total of twenty five possible locations for sunken ship discovery are compiled in the Southwest Island and Kagoshima.

1. はじめに

沖縄埋文研究2(宮城他2004)において、沖縄諸島における沈没船発見の可能性のある事例について紹介した。具体的には、12世紀から17世紀までは遺物の採集事例を中心に、18世紀以降については記録から沈没船と関わりのある事例について17地点の事例報告を行った。2004年には奄美諸島を中心として、沖縄諸島の追加調査を含め同様の手法によって調査を継続した。以下、事例を紹介する。

調査の目的や意義、調査方法については前回の報告を参照されたい。

2. 調査概要

今回は調査前に得られた情報から下記の日程で調査を行った。

第1次調査(2004年5月)

宮古島八重干瀬・多良間島調査。昨年度は潜水調査を実施したが、今回は干潮時に最も八重干瀬があらわれるとされる浜下りの時期に合わせ、池間島沖の八重干瀬に座礁したとされるプロビデンス号の座礁ポイントを調査した。多良間島ではさらに沖に向かって遺物散布状況の踏査を実施した。また、前回できなかった鉄錨の実測も行った。

第2次調査(2004年7月)

今帰仁村沖潜水調査。今帰仁村運天港沖では年代不明の木造船が確認され、古宇利島沖では戦時中の軍船「エモンズ」の沈没が知られている。今回は潜水調査を行い、位置座標と記録写真を撮った。

第3次調査（2004年9月）

奄美大島調査。奄美大島で確認されている周知の遺跡である「倉木崎海底遺跡」を調査し、すでに陸上に引き揚げられている碇石や場所がほぼ特定されている碇石採集ポイント（イカリ浜）において海底の調査を行った。既報告資料（當眞1996）もあるが実測図等未報告の碇石があるため、実測図を作成した。

第4次調査（2004年10月）

鹿児島坊津町・金峰町調査。鹿児島県坊津町坊津・泊・秋目、知覧町知覧、金峰町吹上浜の5つの海岸において海浜の踏査を行った。坊津と泊では現場で陶磁器を採集、坊津歴史資料センター輝津館と金峰町教育委員会ではこれまでに採集された陶磁器を確認した。

第5次調査（2004年11月）

沖永良部島調査。沖永良部島和泊町のウジジ浜では英国カナダ籍船トループ号の座礁ポイントにおいて潜水調査を行った。海底では遺物の散布を認めることはできなかったが、採集遺物が地元で保管されておりこれを確認することができた。

第6次調査（2005年1月）

徳之島調査。徳之島の幾つかの海岸で調査を実施したが、伝承で伝わるオランダ船座礁地点では陶磁器等の散布は認められなかった。

3. 遺跡（確認地点）の紹介

本章では、既に周知の遺跡として、また今回調査によって確認された遺跡や遺物散布地、沈没船関連事例としての碇石などについて紹介していきたい。紹介にあたっては、前回の調査（宮城他2004）にアルファベット記号を追加する形でおこなっている。このため、先の報告の補記を行うものについても掲載した。前回も記述したがアルファベット記号で地点名を示すのは、今後これらの遺跡や遺物採集地点は、直接保存管理する市町村教育委員会によって名称が決められる方がよいと判断したためである。また当該地点はあくまでも遺物採集地点や文献により場所がほぼ特定できる地点であり、追調査によって厳格に検討されるべき場所と考える。

r 地点（鹿児島県大島郡龍郷町イカリ浜） 中世

奄美大島で7本の碇石を確認することができた。但し、出土地点が確認できたのは龍郷町イカリ浜（r 地点）で確認された2本の碇石1件だけである。あわせて、イカリ浜の潜水調査を実施したが遺物の散布などは認められなかった。ここでは、奄美大島において確認されている未報告の碇石について報告する。奄美大島の碇石については當眞氏が詳細な報告（當眞1996）を行っているが、その当時から場所が移動しているものもあるため、現在の所在地一覧表を作成した。



写真1 龍郷町イカリ浜

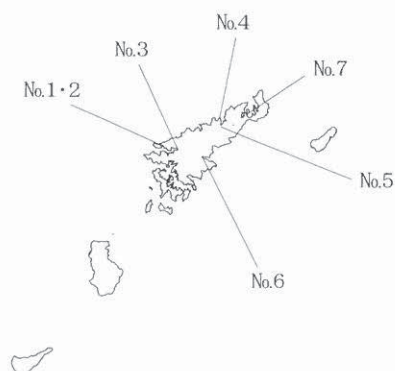
宇検村 宇検村では3本の碇石を調査した。2本は宇検公民館の庭に、1本は田検小学校裏の井戸の橋桁として転用されていた。宇検公民館所在の碇石は便宜的に大きい方をA、小さい方をBとした。

地点名	場所	採集資料	保管場所
r地点	鹿児島県奄美大島龍郷町イカリ浜	碇石	住用村奄美アイランド・龍郷町中央公民館
s地点	鹿児島県奄美大島宇検村倉木崎	12～13世紀中国陶磁器	宇検村教育委員会
t地点	鹿児島県坊津町泊浜	青磁等	歴史資料センター輝津館
u地点	鹿児島県坊津町久志浦・博多浜	陶磁器	歴史資料センター輝津館
v地点	鹿児島県坊津町秋目浦	船体の一部	歴史資料センター輝津館
w地点	鹿児島県金峰町吹上浜	肥前磁器	金峰町教育委員会
x地点	鹿児島県沖永良部島知名町ウジジ浜沖	金属製品	ダイビングショップ「アミーゴ」山本先友氏
y地点	鹿児島県喜界島沖	—	—



遺跡・遺物散布地

地点名	場所	採集資料	保管場所
No.1	宇検村宇検集落 碇家	碇石	宇検村宇検公民館庭
No.2	宇検村宇検集落 碇家	碇石	宇検村宇検公民館庭
No.3	宇検村田検小学校裏の井戸	碇石	宇検村田検小学校裏の井戸
No.4		碇石	名瀬市奄美博物館
No.5	龍郷町秋名集落 肥後家	碇石	名瀬市役所裏 肥後家
No.6	龍郷町イカリ浜沖	碇石	住用村奄美アイランド
No.7	龍郷町イカリ浜沖	碇石	龍郷町中央公民館



碇石

第1図 遺跡・遺物散布地確認地点

第1表 奄美大島所在碇石一覧

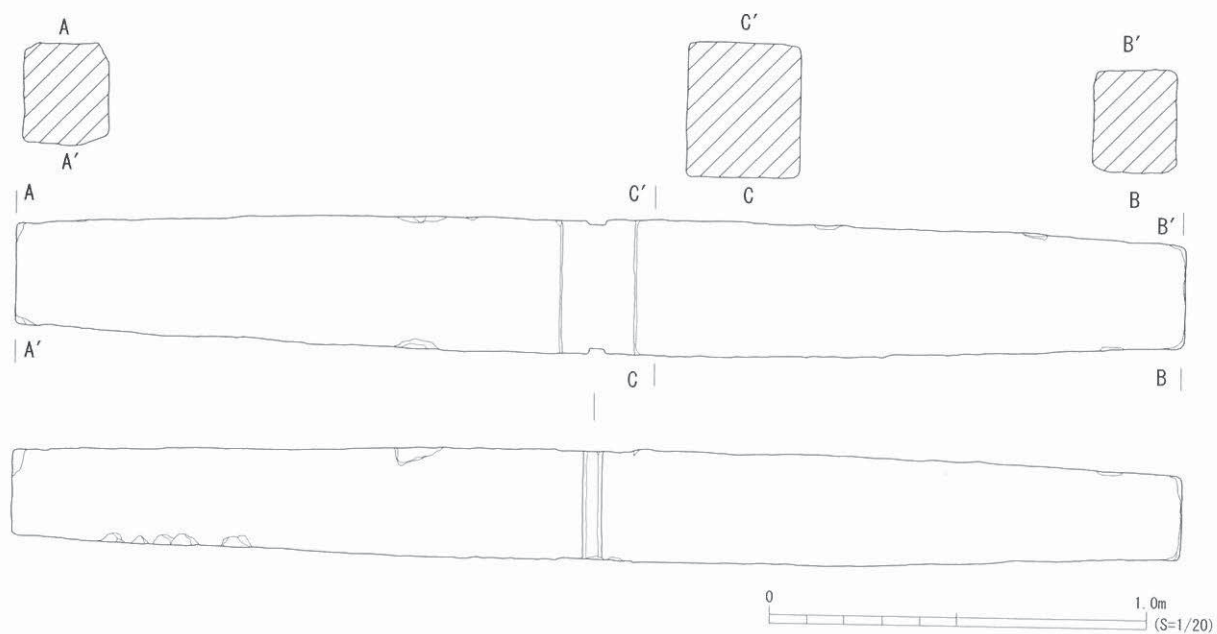
No.	発見場所	現所在地	當眞1996	長軸	分類
1	宇検村宇検集落 碇家	宇検村宇検公民館庭	未報告	309 cm	1 A類
2	宇検村宇検集落 碇家	宇検村宇検公民館庭	未報告	282 cm	1 A類
3	宇検村田検小学校裏の井戸	宇検村田検小学校裏の井戸	未報告	112 cm (復元)	2類
4	?	名瀬市奄美博物館	未報告	225 cm	1 A類
5	龍郷町秋名集落 肥後家	名瀬市市役所裏 肥後家	龍郷町秋名集落 肥後家	326 cm	1 A類
6	龍郷町イカリ浜付近の海底	住用村奄美アイランド	住用村奄美アイランド	300 cm	1 C類
7	龍郷町イカリ浜付近の海底	龍郷町中央公民館	龍郷町中央公民館	200 cm	1 C類

2本とも以前は宇検集落の碇家に置かれていたものだが、現在は宇検公民館に移転されている。松岡氏の1 A類に該当するものである（松岡1981）。石材・加工方法ともによく似ており、1船の船舶に使用されていた可能性が高いと思われる。田検小学校裏の井戸に転用されているものは小型で、2類に該当すると思われる。いずれも出土地点等については不明である。宇検村といえば、近隣には後述する倉木崎海底遺跡が所在する。碇石が陸上にあつて、その行政区内に遺物散布がある事例といえば、沖縄でも久米島の宇江城の碇石とa地点（ナカノ浜）の事例が知られる。時代、碇石の形状からも近い事例として興味深い。以下、今回調査した碇石について紹介する。

No. 1 宇検公民館碇石A（第2図、写真2～4） 大島郡宇検村宇検公民館に所在する。宇検集落の碇家にあったものだが、現在は公民館庭のため池の橋に利用されている。全長309 cm、掟身着装部幅20 cm×深さ0.5～1 cm、固定溝幅5 cm×深さ1.5 cm、中央部幅35.5 cm×厚30 cm、先端部幅27 cm×厚22 cmを図る。石材は凝灰質砂岩と考えられる。幅・厚みともに中央部が最も大きく、先端部に向かうにつれて先細りする。腕部の稜には、僅かだが垂直方向の剥離痕が明瞭に残る。制作時に残ったものか使用中に残ったものかは判断できない。上下左右対称構造を志向することから、松岡氏の分類による1 Aに該当する。

No. 2 宇検公民館碇石B（第3図、写真5～8） 大島郡宇検村宇検公民館に所在する。以前はAと同様に宇検集落の碇家にあったものだが、現在は公民館の脇に置かれている。全長282 cm、掟身着装部幅25 cm×深さ1 cm、固定溝幅6 cm×深さ1 cm、中央部幅33 cm×厚29 cm、先端部幅29.5 cm×厚21 cmを図る。石材はAと同じく凝灰質砂岩と考えられる。幅・厚みともに中央部が最も大きく、先端部に向かうにつれて先細りする。腕部の稜には僅かだが、垂直方向の剥離痕が明瞭に残る。制作時に残ったものか使用中に残ったものかは判断できない。上下左右対称構造を志向することから、松岡氏の分類による1 Aに該当する。

No. 3 田検小学校裏碇石（第4図、写真9～11） 大島郡宇検村田検小学校裏の井戸の橋桁に転用されている。平面は細長い長方形で、断面がほぼ正方形の棒状を呈する。一部破損しており、半分はコンクリートで固められているため、全体を伺うことはできないが、破損している方は一部だけ露胎しているため、厚みを計上することが可能であった。中央に掟身着装部と考えられる幅広の溝を有することから碇石と判断した。反対側の面にも設けられているかは不明である。掟身着装部を中心に左右対称と考えて復元すると全長111 cm、幅10 cm×厚10 cmを図る。石材は判断できないが、石色は黄色を呈し砂質である。



第2図 宇検公民館碇石A

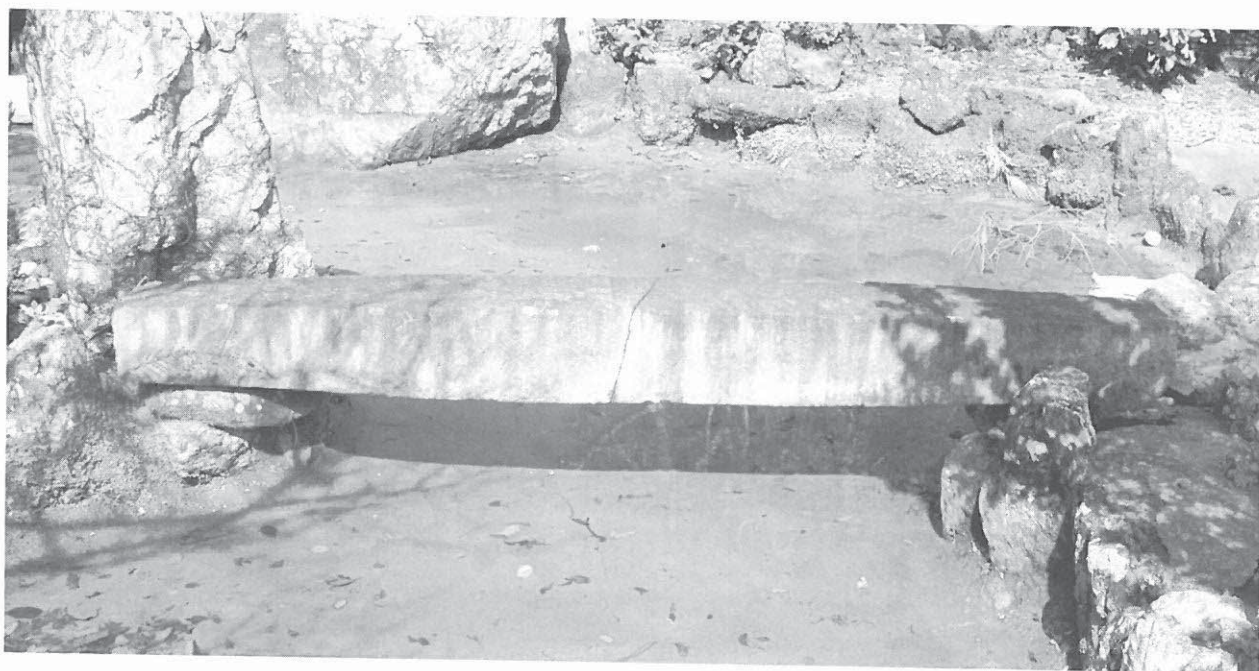


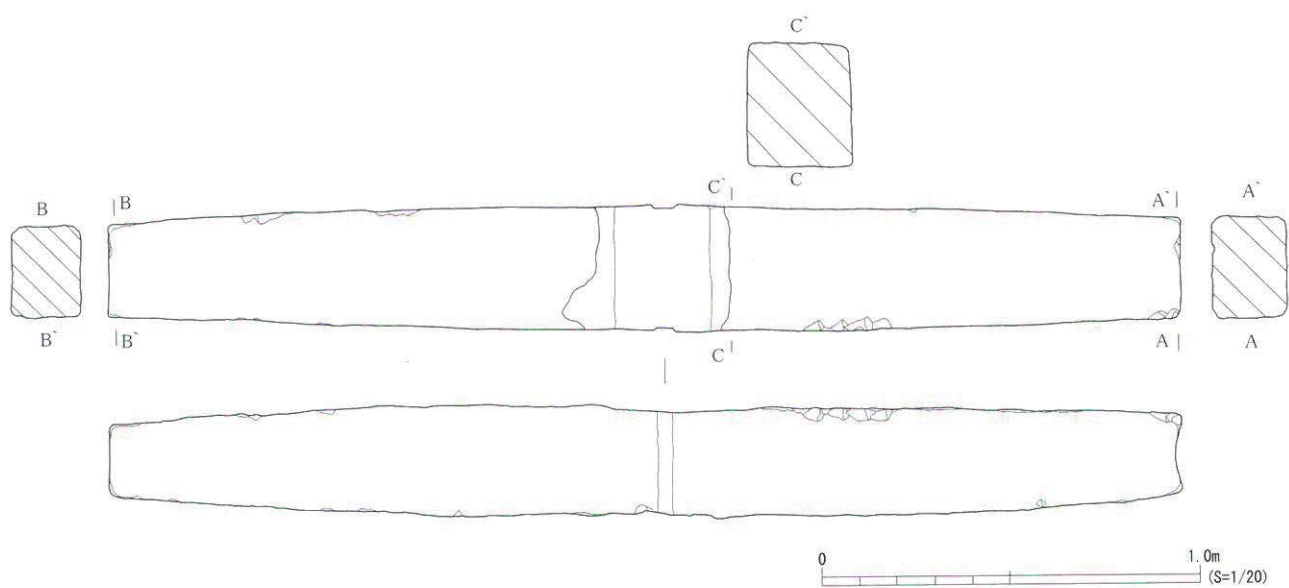
写真2 宇検公民館碇石A



写真3 碇石観察光景



写真4 碇石実測光景



第3図 宇検公民館碇石B

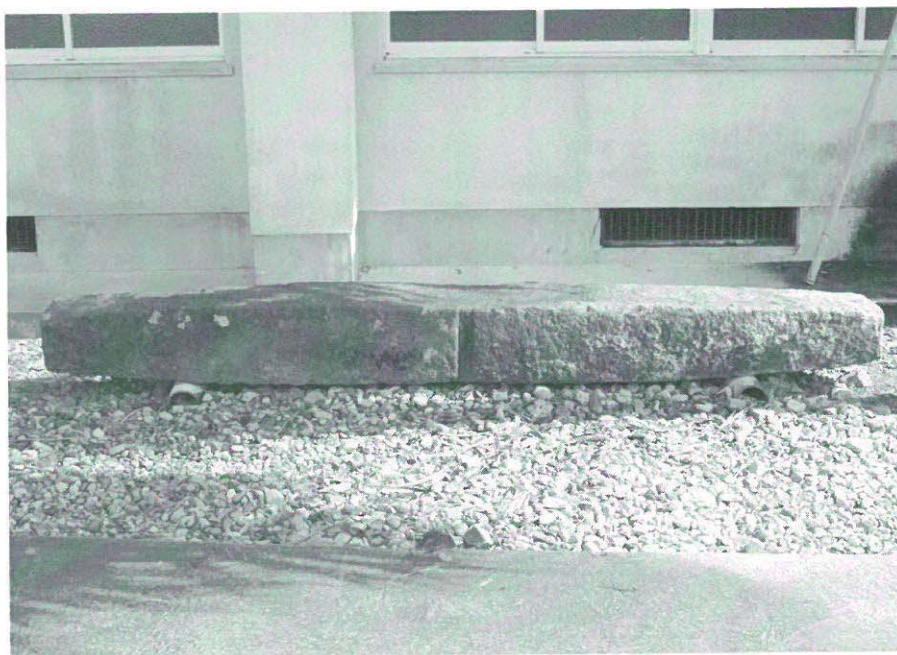


写真5(上) 固定溝

写真6(左)
宇検公民館碇石B

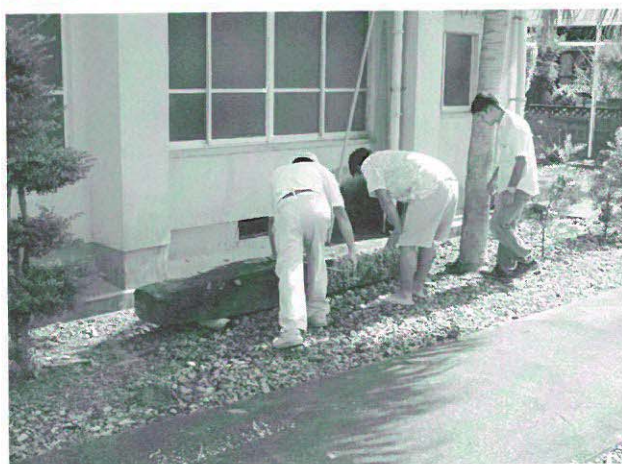
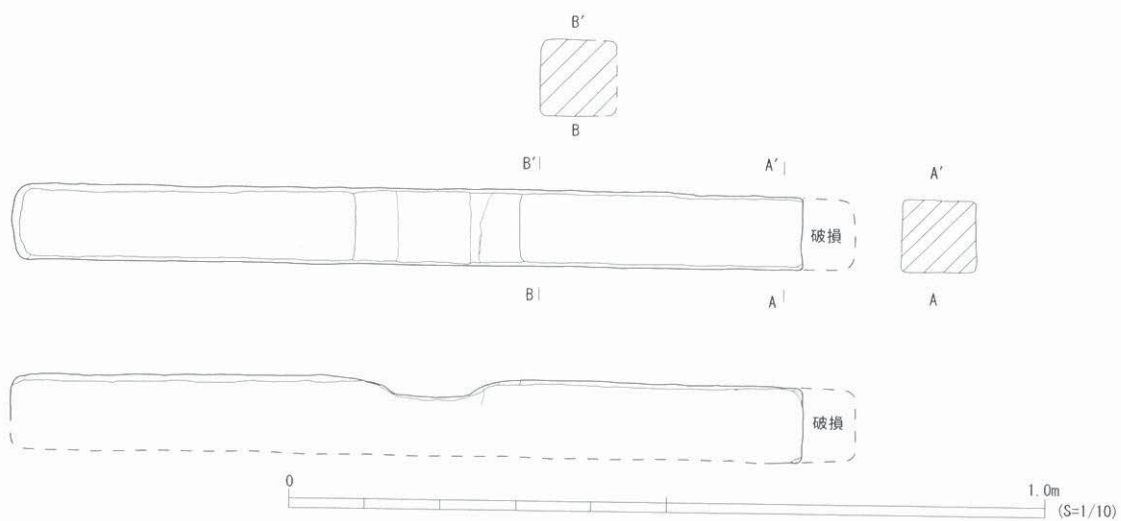


写真7 碇石の観察



写真8 碇石実測光景



第4図 宇検村田検小学校裏碓石



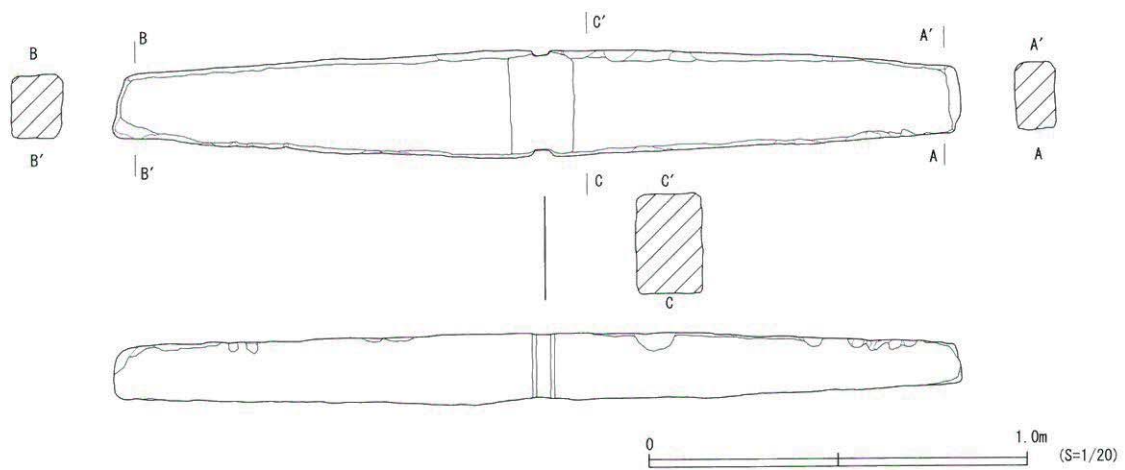
写真9 田検小学校裏碓石



写真10 田検小学校裏碓石(井戸に転用)



写真11 碓石側面



第5図 名瀬市奄美博物館碇石



写真12 名瀬市奄美博物館碇石

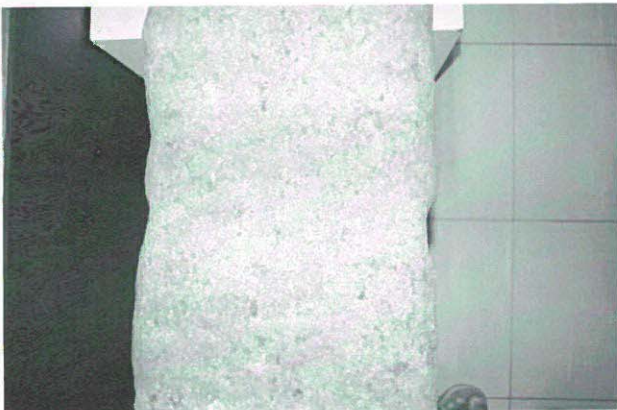


写真13 軸着装部

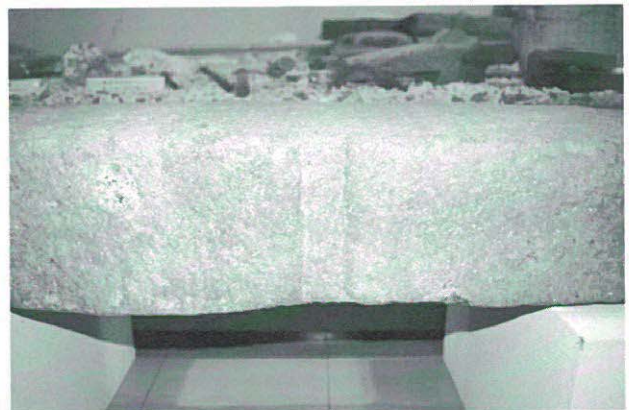


写真14 固定溝

名瀬市 名瀬市では2本の碇石を確認した。その内1本(No.5)は以前は龍郷町秋名の肥後家に所在していたもので、當眞氏によって報告されているものである。現在は移転し、名瀬市役所裏の肥後家の庭に保管されている。もう1本(No.4)は奄美博物館に保管されているものであり、今回、学芸員の高梨修氏に便宜を図っていただき実測等の調査をすることができた。

No. 4 名瀬市奄美博物館碇石 (第5図, 写真12~14) 大島郡名瀬市奄美博物館に所在し、常設展示として展示されている。全長225cm, 掟身着装部幅12cm×深さ0.5cm, 固定溝幅5cm×深さ1.5cm, 右側の中央部幅28cm×厚17.5cm, 先端部幅18cm×厚11cm, 左側の中央部幅28.5cm×厚18cm, 先端部幅16.5cm×厚13.5cmを図る。石材は判断できないが、比較的柔らかい石材なのか磨耗が著しい。松岡氏の分類による1A類に該当するが、先端部における左右の幅や厚さに違いが見られる。この違いが製作時からの違いなのか、使用等による磨耗によるものなのか判断ができなかった。

s 地点 (鹿児島県大島郡宇検村) 12世紀後半~13世紀前半

この場所は「倉木崎海底遺跡」として周知されており、焼内湾入口の枝手久島北側海峡の比較的浅い海底に所在する。平成8年~10年に海底調査が実施され、龍泉窯系の青磁・同安窯系青磁等を中心とした多量の陶磁器群が回収されている(宇検村教育委員会1999)。今回、宇検村教育委員会の元田氏に便宜を図っていただき船にて現場まで移動し、シュノーケルによる潜水調査を実施した。その結果、現在も遺物が多量に散布しており、その集中する地点は報告書に記載されているとおりの範囲であった。



写真15 遺物散布状況① (S地点)

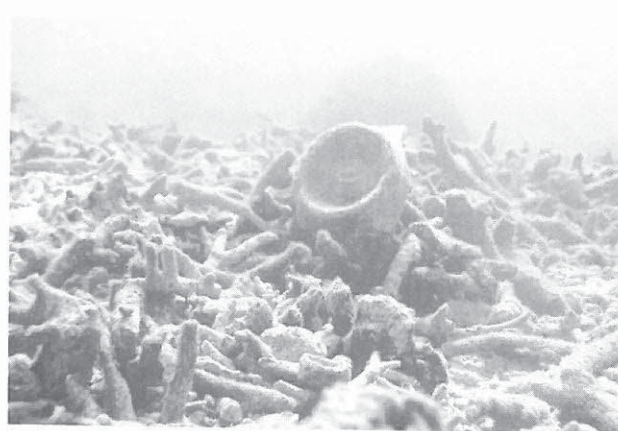


写真16 遺物散布状況② (S地点)



写真17 調査風景 (S地点)



写真18 船酔いするM

t 地点（鹿児島県坊津町泊浜）中世～近世

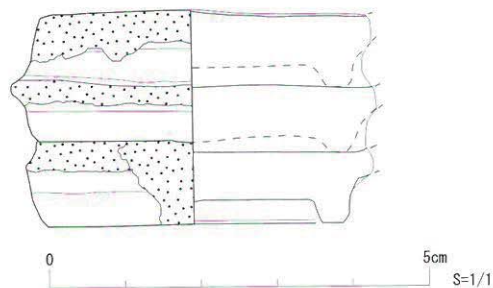
鹿児島県坊津町では海岸で多くの陶磁器が採集されている（橋口1998）。採集された陶磁器を現場及び資料館で確認することができた。坊津泊浜採集の遺物に陶磁器が癒着した状態の資料があった（第6図，写真19）。このような不良品の陶磁器が採集されていることは，この場所が荷揚げ場として利用されていたことを物語るものと考ええる。

u 地点（鹿児島県坊津町久志浦・博多浜）中世～近世

鹿児島県坊津町の久志浦・博多浜では海岸でも陶磁器が採集されている。博多浜では港の地名や屋号を多く残している。博多もそのひとつであるが，唐人町や交易場といった屋号はこれをよく表している。かつて隣接するエゴンタンでは日本水中考古学会によって調査が行われている（南日本新聞1986他）。

v 地点（鹿児島県坊津町秋目浦）中世～近世

鹿児島県坊津町の秋目浦でも採集されているようであるが，調査時には散布を確認するには至らなかった。いずれにせよ坊津町の t・u・v 地点は港として有名である。今後の詳細調査によっては海域において沈没船が発見される可能性があるものと考ええる。実際に工事中に船体の一部が発見されており，その資料が展示されている。



第6図 溶着した陶磁器（t 地点採集遺物）



写真19 溶着した陶磁器（t 地点採集遺物）

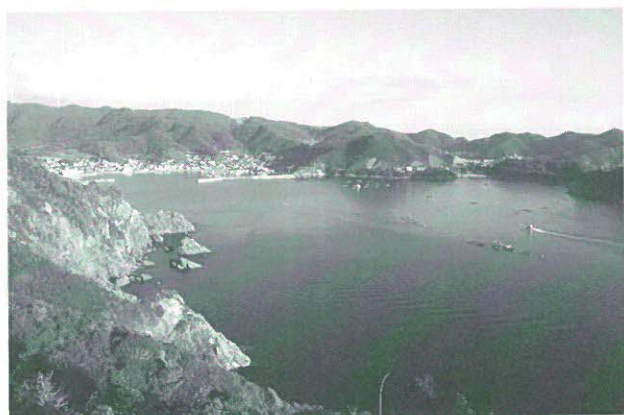


写真20 坊津泊浜遠景（t 地点）

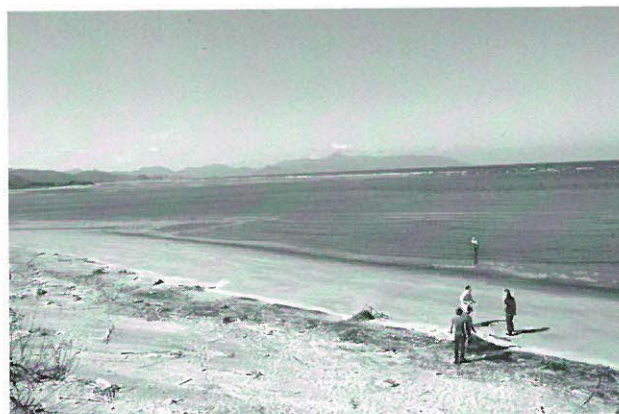


写真21 吹上浜調査風景（w 地点）

w地点（鹿児島県金峰町吹上浜）近世

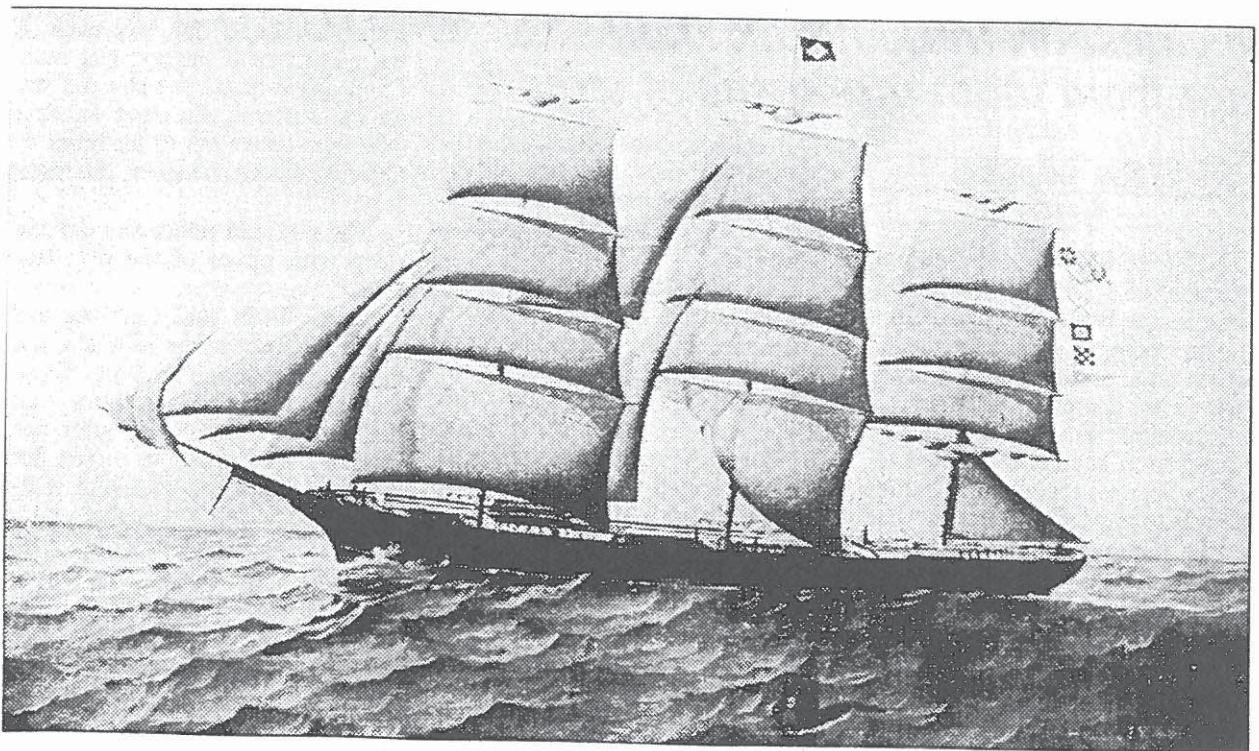
金峰町教育委員会では、吹上浜で採集された肥前磁器を確認することができた。採集された陶磁器は有田・伊万里で東南アジア向けに生産されたものを含むことから、東南アジア向けの船舶からの捨荷等によって散布したものと推測されている（大橋1985）。今回、表面踏査を実施し少量の陶磁器散布が確認できたが、その量は一時期より格段に少なくなってしまったという。

x地点（鹿児島県沖永良部島知名町ウジジ浜，シートループ号）1890年座礁

1890年（明治23年），鹿児島県沖永良部島知名町ウジジ浜沖でイギリス籍カナダの帆船リジー・シートループ号が座礁・沈没した。長崎港を出港し帰路に至る途中であった。乗組員22名の内，12名が死亡し，生存者は名瀬経由で鹿児島へ護送され神戸県庁に引き渡されたという。2年後の1892年，カナダ政府から謝礼金と感謝の銘が刻まれた望遠鏡が届けられた。その後，巨大な鉄錨2本が海底から引き揚げられたが，大阪の商人がどこかに運び出したという。さらに，トループ号に関係すると思われる鉄製品が何本か引き揚げられている。当時の沖永良部島鋼鉄では金具を作る鍛冶職人がいなかったため，道路工事等で重宝された。知名町で漁師をしていた古老からの聞取調査によれば，昭和初期の頃シートループ号と思われる船体の一部が海底で露胎しており，周辺には船窓が散乱していたため，引き揚げて地金屋に売った。現在，船体は砂に埋まって見えなくなってしまったという。

現在，地元のダイビングショップ「アミーゴ」の山本先友氏が熱心に調査をしており，関係文献の収集や海底調査を行っている。その結果，1本の長大な鉄製品が海底で発見され，同氏が保管している（第8図，写真24～25）。

今回，山本先友氏の案内で座礁地点の潜水調査を実施した。海岸は潮流の厳しいところで危険な思いもした。しかし，遺物の散布等を確認することはできなかった。



The Saint John-built Lizzie C. Troop in a painting dated 1885.

第7図 トループ号画（註1）

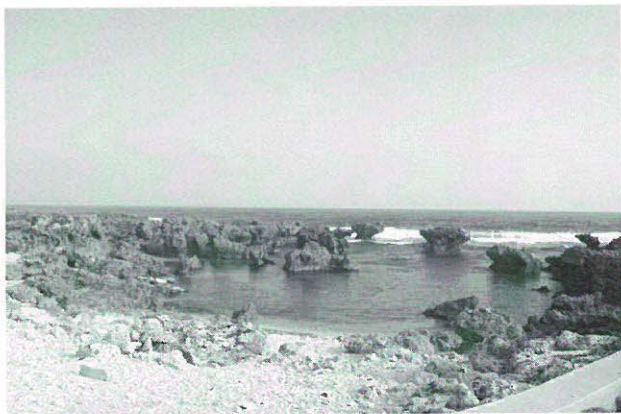


写真22 ウジジ浜近景 (x 地点)



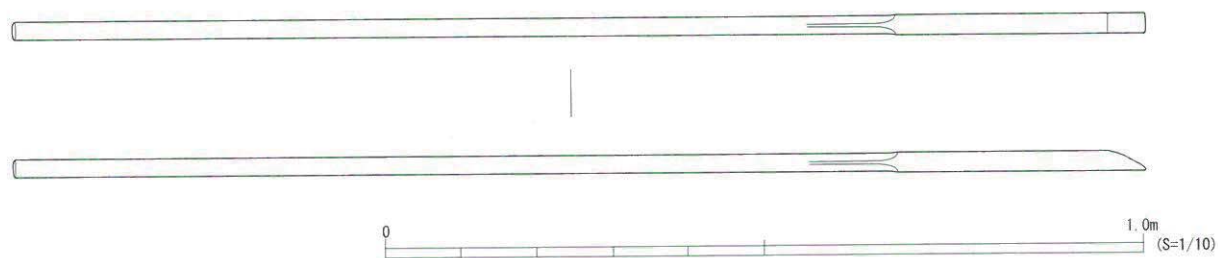
写真23 復元したトループ号 (x 地点)



写真24 ウジジ浜沖引き揚げ鉄製品 (x 地点)



写真25 同先端部 (x 地点)



第8図 ウジジ浜沖引き揚げ鉄製品実測図 (x 地点)

y 地点 (鹿児島県喜界島) 1877年座礁

文献のみの資料であるがシートループ号に先行する1877年(明治10年)、喜界島の沖合でイギリス船が座礁・沈没した。乗組員の大半が死亡したが13人が生存し、長崎へ護送された。まもなくイギリス政府から謝礼の品々が届いたという(註1)。

沖縄県においても当該期(幕末～明治)には多くの船舶が南西諸島沿岸海域で座礁・沈没している

ことが確認されている。このような座礁沈没事例は沖縄だけの特徴でなく、奄美諸島を含み広範囲に及ぶことが想定されるが、これを示す好例としてあげることができる。

q地点（沖縄県宮古郡城辺町吉野） 1853年座礁

宮古島で昨年調査した吉野のバラスト資料について、沈没船との関わりが不明であったが、追跡調査によって1853年に新城村後之浦より約500mの沖合で座礁沈没した英国籍の船（平2001）のものである可能性が高いことがわかった。

4. 沈没船事例の紹介

平成15～16年度に2年間にわたってこのような調査を実施してきた。調査では、多くの方のご協力を得て実施し情報の提供をいただいた。前回調査とあわせて集成した沈没船発見の可能性のある地点はあくまでも沈没記録やその発見の可能性を類推することのできる遺物の発見事例を通して沈没船を発見しようと試みるものである。しかし、実際には海岸近くの多くの散布地では残念ながら船体そのものの発見には至っていない。他方、目的とする中世もしくは近世に往来した船とは無関係であることは否めないものの、木造船もしくは戦時中の沈没船については幾つかの事例を確認することができた。

い地点（運天漁港沖）木造船

ろ地点（古宇利沖）アメリカ軍船



写真26 古宇利島沖アメリカ軍船①（ろ地点）

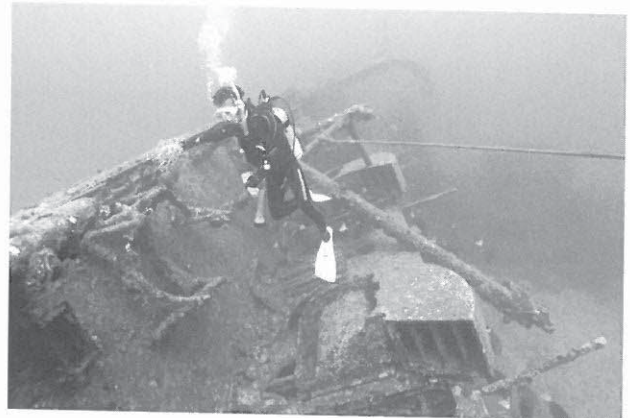


写真27 古宇利島沖アメリカ軍船②（ろ地点）



写真28 運天港沖木造船①（い地点）



写真29 運天港沖木造船②（い地点）

5. まとめ

以上、昨年度に続き今回は奄美諸島を中心に鹿児島県域における近世以前の沈没船・海難事故等関係の調査成果をまとめた。今回の調査によって南西諸島の沈没船座礁地点や海岸で陶磁器が採集される地点を集成することができた。これによって基礎的な情報の整理が行えたことと考える。その数は総計で25地点（a～y地点）に上る。また、未報告の碇石を含め、現在南西諸島で確認することができる碇石は沖縄諸島で4例、奄美諸島で7例である。北部九州を除けば日本列島の中で最も多く確認されていることになる。

この2カ年間の成果を地図に示す（第9図、第10図、第2表）。

今回の重要な成果の一つとして近代から戦争時の事例ではあるが、具体的な沈没船体を確認することができたことがあげられる。一連の調査によって沈没の文献記載や伝承が伝える事例を現場で確認し、陶磁器採集という事実から、沈没船が発見できる可能性を示唆しており、今後も海浜や海底での探査を続けることが重要であることを実証できたものとする。

今後の課題として、研究の深化とともに、やはり遺跡の周知化につきると考える。これについては、陸上の遺跡（埋蔵文化財）についても言えることで、水中遺跡との差は無い。以下に文化庁が発行した『遺跡保存方法の検討－水中遺跡－』引用する（荒木2001）。

『「文化財保護法」にいう埋蔵文化財とは、「土地」に埋蔵された文化財のことをいい（法第57条第1項）、文化財の種類ではなく、文化財の存在する状態を意味する。「土地に埋蔵されている」という状態には、土に埋まっているもののみならず、水中に没しているものも含まれる。一般に埋蔵文化財というと、陸上において埋蔵された遺跡や遺物を想起しがちであるが、水中にある遺跡にも文化財保護法が適用されるのである。

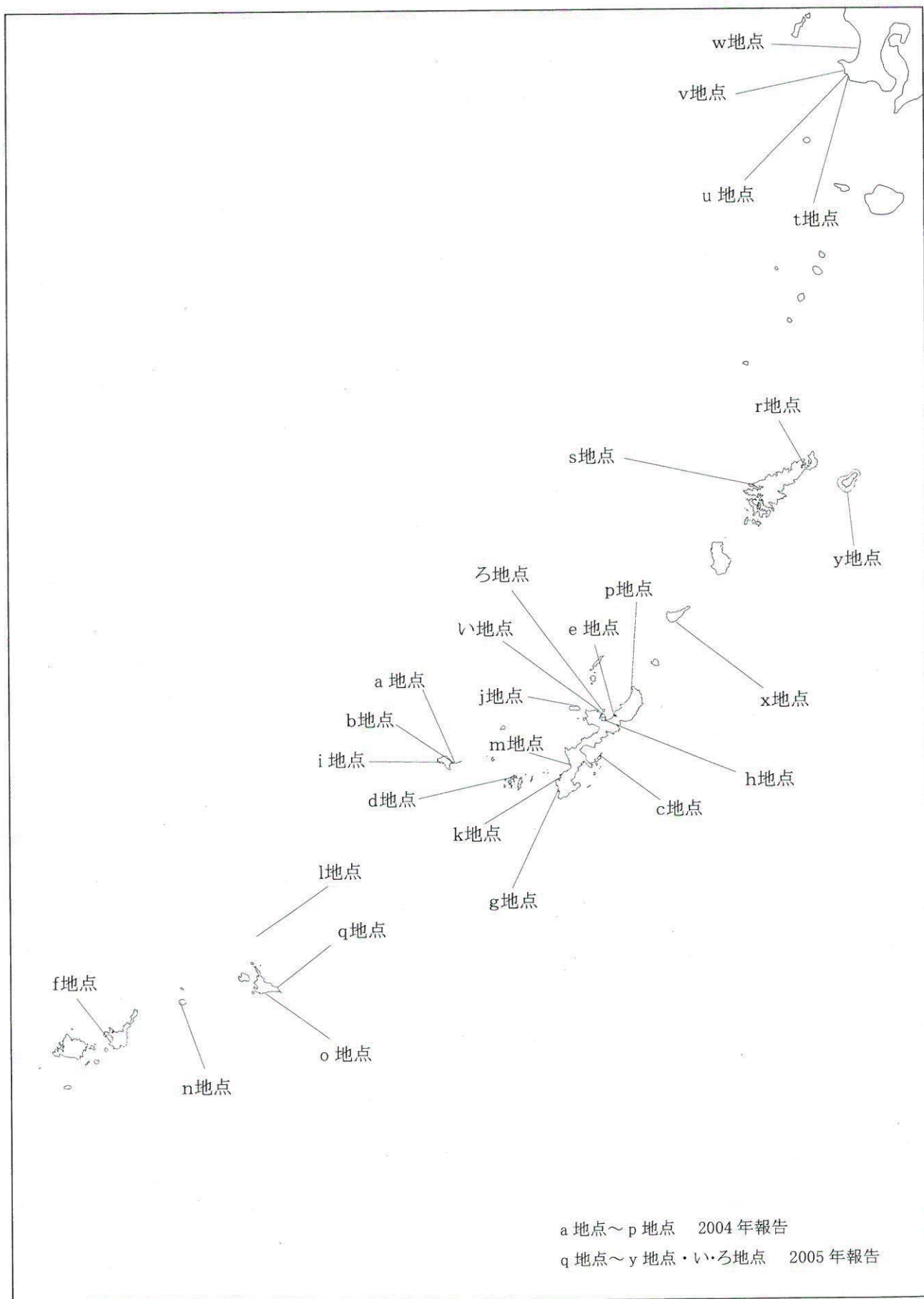
文化財保護法では、文化財が埋蔵されている土地を発掘調査しようとする場合、事前に文化庁長官に届け出ることが義務づけられている（法第57条第1項）。これは濫掘などによる遺跡の破壊を防止するための制度であり、水中の遺跡についても、ダイバーなどが勝手に遺物を引き揚げたり、遺跡の現状を改変することができないことになっている。また、埋蔵文化財を包蔵する土地として周知されている土地において土木工事などを実施する場合にも、事前の届出や通知が必要とされており（法第57条の2、第57条の3）、遺跡の新発見にともなう規則（法第57条の5、第57条の6）もある。これらは、当然のことながら水中の遺跡にも適用される。』

上述するとおり、地下も海底も同じ埋蔵文化財であり法の保護下にあることをより認識するべきである。テレビや新聞報道でしばしば沖縄の近海でも宝探しのような記事が踊るが、これは水中遺跡が危機的状況にあることを示している。今後は遺跡の周知化とともに、文化財保護法を遵守しこれらの水中遺跡の保存問題に取り組むべきと考える。

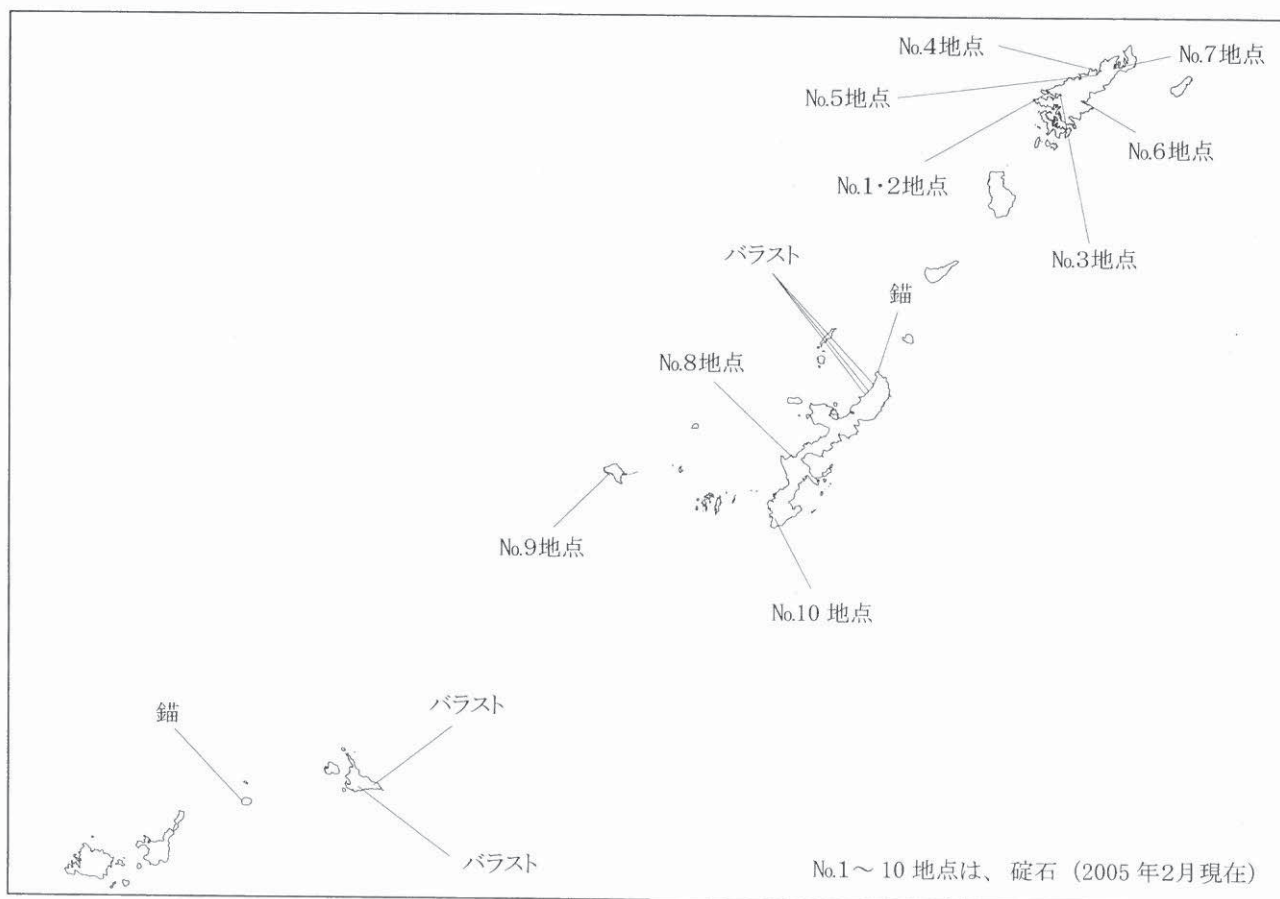
今回の調査を通して、海底で作業を行う場合において専門的知識が必要であることを改めて痛感することとなった。これについては陸上の遺跡での調査手法を簡単に持ち込むことができず、水中では諸種の特殊な技能を有していなければ調査が行えないということに起因する。このため、水中考古学を専門とするスタッフの育成こそ緊急的な課題として考えなければならない。

第2表 遺跡・遺物散布地一覧（2004・2005報告）

地点名	発見場所	確認資料	年代	遺跡名・船名等	保管場所
a地点	はての浜(ナカノ浜)	舶載陶磁器	12後半～13前半、16世紀後半～17世紀前半		久米島自然文化センター、久手賢稔、沖縄県立埋蔵文化財センター
b地点	オーハ島沖	舶載陶磁器	14世紀後半～15世紀前半		久米島自然文化センター、久手賢稔、沖縄県立埋蔵文化財センター
c地点	伊計島沖	舶載陶磁器	14世紀後半～15世紀前半		与那城町海の文化資料館
d地点	座間味村阿護の浦	沖縄産陶器、舶載陶磁器	15世紀頃、19世紀?		座間味村教育委員会
e地点	塩屋湾	舶載陶磁器	15世紀代		未確認
f地点	名蔵湾	舶載陶磁器	15世紀中頃		先島文化研究所、石垣市教育委員会、沖縄県立博物館 等々
g地点	瀬長島地先	舶載陶磁器	15世紀中～16世紀前半		沖縄県立埋蔵文化財センター
h地点	今帰仁村今泊沖	舶載陶磁器、沖縄産陶器	15世紀中～16世紀前半、19世紀?		今帰仁村教育委員会
i地点	久米島白瀬川河口	舶載陶磁器	14世紀～15世紀		未確認
j地点	伊江島北海岸	舶載陶磁器	15世紀後半～16世紀前半		今帰仁村教育委員会
k地点	那覇港	舶載陶磁器			東京大学総合研究博物館?
l地点	八重干瀬	バラスト等	1797年座礁	プロビデンス号(英)	平良市池間公民館(未確認)
m地点	北谷町沖	舶載陶磁器、バラスト	1849年座礁	インディアン・オーク号(英)	北谷町教育委員会
n地点	高田海岸	舶載陶磁器、鉄錨	1857年座礁	ファン・ボッセ号(蘭)	多良間村立ふるさと民俗学習館
o地点	上野村宮国沖	バラスト	1873年座礁	ロベルトソン号(独)	上野村野原公民館
p地点	国頭村宜名真沖	舶載陶磁器、バラスト、鉄錨	1874年座礁	(英)	国頭村奥交流間、宜名間集落等
q地点	城辺町吉野海岸沖	バラスト	1853年座礁	(英)	城辺町吉野集落
r地点	龍郷町イカリ浜沖	碇石	中世		住用村奄美アイランド、龍郷町中央公民館
s地点	宇検村倉木崎	舶載陶磁器	12後半～13前半		宇検村教育委員会
t地点	坊津町泊浜	舶載陶磁器	中世～近世		坊津町歴史資料センター輝津館
u地点	坊津町久志浦・博多浜	舶載陶磁器	中世～近世		坊津町歴史資料センター輝津館
v地点	坊津町秋目浦	舶載陶磁器	中世～近世		坊津町歴史資料センター輝津館
w地点	金峰町吹上浜	肥前磁器	近世		金峰町教育委員会
x地点	知名町ウジジ浜	鉄製品	1890年座礁	シー・トループ号(英)	「アミーゴ」山本先友
y地点	喜界島沖		1877年座礁	(英)	未確認
い地点	今帰仁村運天港沖	船体			海底
ろ地点	今帰仁村古宇利島沖	船体	1945年沈没	(米)	海底
No1	宇検村宇検集落 碇家	碇石(1A)	中世		宇検村宇検公民館庭
No2	宇検村宇検集落 碇家	碇石(1A)	中世		宇検村宇検公民館庭
No3	宇検村田検小学校裏の井戸	碇石(2類)	中世～近世		宇検村田検小学校裏の井戸
No4	?	碇石(1A)	中世		名瀬市奄美博物館
No5	龍郷町秋名集落 肥後家	碇石(1A)	中世		名瀬市市役所裏 肥後家
No6	龍郷町イカリ浜沖	碇石(1C)	中世		住用村奄美アイランド
No7	龍郷町イカリ浜沖	碇石(1C)	中世		龍郷町中央公民館
No8	恩納村山田グスク	碇石(1A)	中世		恩納村山田グスクメーガー
No9	久米島宇江グスク	碇石(1A)	中世		久米島自然文化センター
No10	糸満市内道路脇	碇石(2類)	中世～近世		糸満市教育委員会



第9図 遺跡・散布地確認地点 (2004~2005)



第10図 碇・バラスト

謝辞

昨年度より実施してきた基礎的調査によって遺物等が海岸に散布する事例をある程度集成できたと考える。今後は遺跡の周知化と遺跡保存への対応に関する問題について、南西諸島の海域に遺跡があるという情報を共有し、考古学の対象として遺跡や遺物をきちんと分析することが重要であると考え

る。
以上、このような作業をする中で知ることのできた知見の多くは、これまで市町村で遺跡の保存にあたってこられた担当者の方から多くの情報をいただくことで整理できたことである。末文ながら記して謝意を表す。

調査に関しては以下の方よりご指導いただいた。

安里嗣淳・盛本勲（沖縄県立埋蔵文化財センター）、池田榮史（琉球大学）、江上幹幸（沖縄国際大学）、新里亮人（伊仙町教育委員会）、新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）、高梨修（名瀬市教育委員会）、中山清美（笠利町教育委員会）、西銘章（嘉手納高校）、早水廣雄・橋口亘（坊津町教育委員会）、宮下貴浩（金峰町教育委員会）、元田信有（宇検村教育委員会）、森田太樹（知名町教育委員会）、山本先友（ダイビングショップ「アミーゴ」）

（みやぎ ひろき：今帰仁村教育委員会）

（かたぎり ちあき：調査課 専門員）

（ひが なおき：臨時任用職員）

（さきはら つねひさ：嘱託員）

註

註1 山本先友氏より資料をいただいた。

引用・参考文献

- 荒木伸介 2001年 「第5章 日本の水中遺跡4」『遺跡保存方法の検討－水中遺跡－』 文化庁
- 宇検村教育委員会 1999年 『倉木崎海底遺跡』
- 大橋康二 1985年 「鹿児島県吹上浜採集の陶磁器片」『三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁器編』
- 平 和彦 2001年 「中国苦力貿易船と琉球諸島」『奄美郷土研究会報』第37号
- 當眞嗣一 1996年 「南西諸島発見の碇石の考察」『沖縄県立博物館紀要』第22号 沖縄県立博物館
- 松岡 史 1981年 「碇石の研究」『松浦党研究』No.2 松浦党研究連合会
- 橋口 亘 1998年 「鹿児島県坊津町泊海岸採集の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
- 南日本新聞 1986年4月9日 「坊津の海底文化財探査へ」『南日本新聞』（新聞記事）
- 南日本新聞 1986年6月24日 「来月25日から海底探査」『南日本新聞』（新聞記事）
- 宮城弘樹他 2004年 「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査－海洋採集遺物からみた海上交通－」
『沖縄埋文研究』第2号 沖縄県立埋蔵文化財センター